

モンゴル伝統医療へのグローバル化の影響

——医療機関に勤務するモンゴル医師の語りから——

首都大学東京 包曉蘭

1 目的

本報告の目的は、中国内モンゴルにおける伝統医療であるモンゴル医療を取り上げ、中国政府によるモンゴル医療制度化の背景を歴史・社会的動態を踏まえながら整理し、今日のグローバル化した状況下で伝統医療が直面している課題と展望について明らかにする。その背景にはまず、時代の潮流として20世紀後半から伝統医学知識を知的財産として認め、それを伝統的に保有してきた人々の権益を保護しようとする活動がはじまったことが挙げられる。また、アジア諸国においては西洋医療の限界が指摘され、それを補う相補・代替医療として、伝統医療が再評価されている。こうした国際的な潮流のなかで、モンゴル伝統医療の現状はどうであるのか、モンゴル民族特有の知的財産として公認され、中国の医療制度化する過程を考察する。

2 方法

本報告では、2011年4月から2015年8月の間に内モンゴル自治区における医療機関に勤務するモンゴル医師20名を対象に行われた半構造的調査法による調査データを用いた分析を行う。調査項目は、モンゴル医師になった経緯、そして医療機関に勤務するようになった過程、さらに、モンゴル医療を取り巻く諸状況の変化について質問を設定した。調査時間は、対象者1人に対し2～5時間であり、男性10名、女性10名であり、平均年齢は46.4歳、平均職歴は22.2年であった。最終学歴は、徒弟制で教育を受けた人は5名、衛校卒は（日本でいう医学専門学校に相当する）4名、大学卒は11名であった。調査は筆者が医師の都合に合わせて、職場や自宅で行った。

3 考察

近代社会における西洋医療は、非西欧諸国においても広く医療システムの中に取り入れられた。中国も例外ではない。中国に元々あった中医学でさえ、長年にわたって西洋医療と対立が続いた。そして、中国領内にあるモンゴル医療は、より一層打撃を受けた。土着の文化が排除され始め、伝統医療の消滅が危惧される段階まで追い込まれた。しかしながら、伝統医療を保護する動きもあらわれた。その理由は、①モンゴル医療がモンゴル民族地域で根強く浸透していたこと、②中国で西洋医療が浸透しても国民全体には行き届かなかったこと、③西洋医療の限界性が顕わになったことによる。結果として、中国中央政府からモンゴル民族特有の知的財産であるとし、伝統医療として公認された。

4 結論

現在、モンゴル医療は伝統医療体系とされ正規に医療システムとしての中国の医療政策に組み込まれた。その結果、これまでのモンゴル民族が居住する地域に限定された利用から多民族や他国の人から求められるようになった。つまり、モンゴル伝統医療の知名度が上がることになった。また、モンゴル医療そのものの特徴とモンゴル医療薬は、動植物など自然のものから作られるため、経済的にも利用しやすい。それと対照的にモンゴル医療は単なる医療実践となるだけでなく経済的な価値も高くなった。一方で、医療システムに組み込まれることによって、モンゴル医療の文化的豊かさも失われつつあり、その保全が今後の課題となっている。

文献

池田光穂, 2002, 「民族医療の領有について」『民族学研究』67(3): 309-325.

池田光穂・奥野克巳, 2007, 『医療人類学のレッスン: 病いをめぐる文化を探る』学陽書房.